

日本人のスピリチュアリティ（霊性）について考える — 空海の密教思想の影響を中心として —

高木廣文¹

¹ 神戸市看護大学

キーワード：空海、即身成仏、十住心論、霊性、密教

Discussion on Japanese Spirituality Focused on the Influence of Esoteric Buddhism by Kukai

Hirofumi Takagi¹

¹Kobe City College of Nursing

Key Words: Kukai, Attaining Enlightenment in This Very Existence, the Ten Stages of the Development of Mind, spirituality, Esoteric Buddhism

1. はじめに

1) 健康とスピリチュアルについて

人生 100 年時代とか言われているが、健康でなければ意味がない。しかし、「健康」とはどのような状態を意味するのか、明確にその概念を表すのは難しい。WHO (World Health Organization 世界保健機構) による健康の定義がよく引用されるが、1998 年にその改定案が議論された。WHO 執行理事会（総会の下部機関）で、WHO 憲章全体の見直し作業があり、「健康」の定義を、“Health is a dynamic state of complete physical, mental, spiritual and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.” と「身体的、精神的、社会的状態」の他に「spiritual（「霊的」と訳す）」という用語を追加する案が出された。これに対して、賛成 22、反対 0、棄権 8 で総会の議題とすることになった（厚生労働省, 1999a）。総会の B 委員会（総務、財政、法的事項を担当）において、現行の憲章は適切に機能しているので、本件のみを早急に審議する必要性は他の案件に比べ低いなどの理由で、健康の定義に係る前文の改正案を含めその他の憲章に係る改正案と共に一括して、審議しないまま事務局長が見直しを続けていくこととされた（厚生労働省, 1999b）。このような経緯から、WHO の健康の定義が変更されて「霊的」という言葉が加わったと誤解されることも多い。

がん患者等の増加に伴い、緩和ケアの必要性が標榜

され「スピリチュアルペイン」として、人生の意味への問い・自責の念・死生観に対する悩み・死への恐怖等が挙げられている（厚生労働省, 2021）。人生を苦痛なく終わる意義は大きいだろう。しかし、Quine（1960）が「翻訳の不確定性」を指摘しているように、言葉の意味はその社会の歴史や文化的背景に依存している（大出・宮舘訳, 1984）。キリスト教的な“spiritual”という概念が、そのまま日本人に当てはまるか疑問である。

2) 死生観とスピリチュアリティ（霊性）

死は全員に平等だが、死が怖いとか死ぬのは嫌だと言えるのは生きているからである。臨死体験者はいるが、結局は死んではないので、その経験は死の経験ではない。人は死の経験がないために、来世を信じていても未知な事は不安であり、死はやはり恐ろしいだろう。信仰から死後の復活を強く信じていれば、死を恐れないかもしれないが、日本人の多くが考える極楽浄土とキリスト教徒やイスラム教徒が考える天国は異なっている。

キリスト教などは絶対神への信仰・帰依であり、死後すぐに天国や地獄に行くのではない。旧約聖書や新約聖書には詳細な記載はないが、イスラム教の聖典であるクルアーン（コーラン）には、復活と天国・地獄の話は多い（井筒, 1957）。例えば、復活と最後の審判について、「まことに、信仰ある人々（回教徒）、ユダヤ教を奉ずる人々、キリスト教徒、（略）誰であれアッラーを信仰し、最後の（審判の）日を信じ、正しいこと（敬虔な行為）を行う者、そのような

者はやがて主から御褒美を頂戴するであろう。(略)」とある(井筒, 1957, p23)。「誰でもアッラーとその使徒(マホメット)の言い付けに従う者は潺々と河川流れる楽園に入れて載いて、そこに永久に住むことになろう。(略)だが、誰でもアッラーとその使徒の言い付けにそむき、戒めの線を踏み越えるような者は、劫火の中につき落されて、そこに永久に住みつき、恥しい罰を受けることになろうぞ。」(井筒, 1957, p131-132)のように、永久の天国と地獄の区別が明確にある。地獄に落ちた者は、永遠にその劫火に苛まれ、そこに救いはない。

仏教では死ぬと、六道(地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天)を生存時の因果応報により輪廻転生する。もしくは声聞、縁覚、菩薩、仏を加えた十界を永遠に巡ることになるとされている。さらにこれらの十界が細分され三千世界を輪廻するとされる。釈迦による初期の原始仏教では生は苦であり、解脱して涅槃に入ることで輪廻から抜け出すことが理想とされる。大乘仏教、とくに浄土教や浄土真宗では全ての衆生が浄土に往生するまでは、悟りを開いた菩薩でも、如来にはならず涅槃に入らないとされている(梅原, 2005, 989-1001 / 4892)。

このように、宗教と霊的世界観には関係が深いと言えるだろう。日本人の霊性(spiritualityの邦訳)を考えるために、まず日本人の独特ともいえる宗教観は、どのように形成されてきたのかを考えてみたい。

2. 日本人の宗教観と霊性について

著名な仏教学者である鈴木大拙(1944)は、日本人の霊性は鎌倉時代にはじめて自覚されたとしている(鈴木大拙文学研究会, 2021)。法然、親鸞らによる浄土系思想は今も存続しており、禅や念仏が日本的霊性的直覚に基づくもので、鎌倉時代に覚醒したことは事実かも知れない。しかし、法然、親鸞、日蓮などは全て伝教大師最澄が開いた天台宗の影響があり、これを軽視している(宮坂・梅原, 2014)。平安時代の宗教的思想家である最澄と空海は、日本に大乘仏教とくに密教思想を広め、その後の仏教のあり方を大きく変えた。

親鸞の弟子の唯円が著した『歎異抄』の第十五条によれば、空海による即身成仏は真言密教の秘教であり、身口意の三密の行や、最澄による六根清浄のための法華一乗の教えによる行は難行で、凡夫には不可能であり、この

ために易行である口称念仏(「南無阿弥陀仏」と唱える)で極楽浄土に往生できるとする浄土真宗の教えを親鸞は広めたのである(梅原, 2002)。

最澄と空海はともに遣唐使として、唐にわたり密教を伝えた。最澄は天台宗の教えを学ぶのが主目的で、密教は従であったが、空海は密教を学ぶことが主で、唐の青龍寺の恵果和尚から灌頂を受け密教の八祖となった。

最澄は還学生であり、804年入唐して805年の1年足らずで帰国した。一方、空海は留学生で本来の期間が20年のところを、恵果和尚の遺言もあり806年に帰国するという「闕期の罪」を犯した(梅原, 2005, 4892 / 4397)。これは死罪にも値する罪であった。

密教伝来に関しては最澄が空海に先んじているが、最澄は真の密教を学んではいなかった。そのため、空海が朝廷に提出した『請来目録』(空海, 806)に記載された密教の知識を学ぶために、812年に高雄山寺(現神護寺)で空海から灌頂を受けている。最澄と空海は『理趣釈経』の借用を巡ったトラブルで絶縁してしまう(加藤, 2013a, 574-604/2645)が、最澄は天台宗に密教は必要であると考え、弟子には真言密教を学ばせており、円仁や円珍は唐にわたり密教を学んで天台本覚論を生み出した(梅原, 2005, 2269/4892)。天台本覚論では「山川草木悉皆成仏」「草木国土悉皆成仏」で象徴されるように、人間以外でもあらゆるものに仏性があるとする(梅原, 2005, 2280/4892)。これは真言密教の教えなので、空海の論書でも同様である。この思想は現在でも多くの日本人が事物に抱く宗教心や霊性の基礎になっていると考えられるので、密教を通して最澄にも影響を与えた空海の真言密教の思想は極めて重要と言えるだろう。

3. 空海の真言密教について

1) 日本人の宗教観について

空海の本言密教の説明の前に、まず日本人の宗教観を再度検討してみる。日本人の宗教に関する調査では、「無宗教」が約7割いる(阿満, 2004, 59-67/2273; 島田, 2009, 120-149/1879;)。しかし、本当に神を信じないのでなく、「無宗教」という言葉の意味が欧米とは異なっているためであると考えられる(阿満, 2004, 124-196/2273)。

日本人はクリスマスを祝ったり、正月は神社やお寺に初詣に行くし、お盆にはお墓参りに行ったりする。このような行動

は宗教的行動であるが、多くの日本人は宗教的とは考えていない。歴史的に「宗教」という言葉自体が日本になかったためであり、明治以前は仏道や仏教のように、個別の呼び方はあったが総称名はなかった。明治時代にキリスト教が公に入ってきたときに、様々な信仰を全て「宗教」と総称するようになった。このため、宗教という言葉は、キリスト教的な一神教のような絶対神を信仰することを示すもの、という考え方が生じたようである。絶対神への帰依が日本人の感覚に合わず、多くの人が「無宗教」と答えるのではないかと解釈できる（島田, 2009, 389 - 423 / 1879）。

2) 空海の生涯について

空海を思想を理解する助けとするために、加藤（2013a）を参考に、空海の生涯を簡単に述べる。

空海は774年6月15日生まれとされているが、真言密教第6代相承者である不空三蔵の命日と空海の誕生日が一致するようにしたものと考えられる。空海の命日は835年3月21日であるが、真言宗では空海は死んでおらず、入定して現在も修行中であるとされている。

空海は四国讃岐国多度郡、現在の香川県善通寺市付近で生まれた。佐伯家の三男、幼名は真魚と呼ばれ、長男と次男が亡くなり、後継者としての期待を一身に受けていた。佐伯家は、現在の香川県知事的な役割をもつ守護の家系であり、母方の叔父の阿刀大足から漢籍を習ったと言われている。

18歳（数え年、以下同様）で当時唯一の官吏養成のための大学の明経科に入学する。極めて成績優秀だったが、当時の最高学府を辞めてしまう。24歳で空海（797）は『三教指帰』を書き、その退学の理由について述べている。当時学問の中心であった儒教ではなく、大乘仏教が最高の教えであるという内容の戯曲である。主人公である蛭牙公子という性欲と食欲と物欲しかない若者を論ずるために、まず儒教の先生（亀毛先生）が、次に道教の先生（虚亡隠士）が、最後に空海本人がモデルである仮名乞児が大乗仏教の教えを説いて指導し、蛭牙公子を導くという話である。空海は官僚になるのではなく、大乘仏教により親族だけでなく、全人類に貢献するという決意表明の書である（弘法大師空海全集編輯委員会, 1984; 加藤・加藤, 2007）。本書には、空海が大学を辞めて山野で修行を積んだこと、室戸岬の岩窟で修行中に「明星来影」（明けの明星が口の中に飛び込んできたという神秘体験）

の記述がある。三教指帰は当初は『禪譬指帰』と称されており、高野山に今でも直筆の原本が残されている。

空海は密教の『大日経（大毘盧遮那成仏神変加持経）』の内容を理解したいと考えたらしい。そのためには唐に行く必要があると考え、31歳の時に遣唐使の留学生として入唐を志す。この間の12年間の空海の行動はよくわかっておらず、正式に得度した僧でない私度僧の空海がなぜ留学生になれたのかも不明である。

遣唐使船は4艘で出発した。空海は第1船に遣唐大使と共に乗り、第2船には最澄が乗っていたが、台風により第3船と第4船は沈没してしまう。空海の乗った第1船は約1ヵ月間漂流し唐に漂着する。空海は苦労して長安に着いたが、恵果和尚の青龍寺にはすぐには行かずに、經典の読解のために梵語を勉強してから青龍寺に行った。恵果和尚は空海に会うなり、「もう自分の命はすぐに尽きるので、あなたに全てを伝えたい」と言ったと伝えられている。当時の青龍寺には、門弟は何千人といたが、島国から来た一青年になぜそのように接したのかは不明だが、空海に3ヵ月程の短期間に正式な密教の弟子となる灌頂を行い、正式な第8代密教相承者になる。第1代は大日如来、第2代が金剛薩埵（ここまでは宗教上の人物）、龍猛（真言密教のみ、通常は「龍樹」）、龍智、金剛智、不空、恵果、そして空海となる。

密教の神髄を伝え終わると、恵果和尚はすぐに亡くなってしまうが、「私はもう死ぬ。あなたの国で生まれ変わるから私を弟子にして密教を栄えさせてくれ」と遺言を残す。この師の命により、本来20年の留学期間を空海は2年余りで帰国する。これは、「闕期の罪」という重罪であり、帰国後は京都に上ることを差し止められる。この釈明も兼ねて『請来目錄』（空海, 806）を献上し、空海が真の密教を日本にもたらしたことを言上した（弘法大師空海全集編輯委員会, 1983b）。

806年に桓武天皇が崩御し、809年に平城天皇から嵯峨天皇になると空海は許され、高尾山寺（現在の神護寺）に入る。43歳で密教修業の場として高野山を賜り、44歳で『即身成仏義』（空海, 817）を書き、東寺を下賜される。55歳の時、庶民の教育のために「綜芸種智院」を開設する。日本初の私立大学であり、仏教だけではなく儒教や道教も学べるようにした。勉学に集中できるように、衣食住の設備を備えた施設であったが、空海が亡くなってしばらく経つと、財政難から閉校してしまう。

57歳の時に淳和天皇の勅命があり、仏教の主な宗派に対して、自分たちの宗派の何が優れているか（教相判釈）を書いて提出するように下知される。空海（830b）は『秘蔵宝鑰』とその資料集として『秘密曼荼羅十住心論』（空海, 830a）を提出する。これによって、当時の仏教界の優劣がほぼ決まってしまったと言われている。奈良仏教の時から各宗派による論争が、空海によって統一される。

62歳で亡くなるのだが、真言密教では定に入るといって（入定）、今も座禅を続けていることになっている。『御遺告』（空海, 835）によれば、空海は兜卒天で弥勒菩薩と共に修行し、56億7千万年後にまた戻ってくると述べている（弘法大師空海全集編輯委員会, 1985）。

没後87年目に醍醐天皇より「弘法大師」の諡号を下賜された。

3) 大乘仏教の基本的教えについて

大日経の「入真言門住心品」（宮坂, 2011: 13-107）の第一から六に、大日如来に対して金剛薩埵が「世尊かくの如く、知恵は何を以て因とし、いかに根とし、いかにが究竟とするや（知恵は何が原因か、何がその元になっているのか、何を究竟とするのか）」と質問する。大日如来は「菩提心を因とし、大悲を根とし、方便を究竟とす」と答えた。大乘仏教の教えは、この問答に尽きると言われており、全ての経典はこの問答の説明に過ぎないとされ、三句の法門と言われている。

「菩提心」とは「実の如く自心を知る」とされ、仏陀になるための悟りを求める心である。仏陀とは悟った人であり、この世の全てを説明できる一切智と呼ばれる智慧（一切智智）を持つ者である。

「大悲」とは、慈悲の心である。慈は樂を与えることで、大非は苦を抜いて樂を施すことから、「抜苦与樂」と言われる。大乘仏教では、自分のみが極樂往生するのではなく、全ての衆生が成仏することを目指している。

「方便」とは、「嘘も方便」の方便で、手だてのことであり、「かの万行所成の一切智智の果」とされている。つまり、他人を利するための手段であると考えられる。例えば、悪事を働く者には、「このままでは地獄に落ちてしまう」とか、「親孝行に努めれば天国に行ける」のように善行を勧めたりする。実際に、天国や地獄があるか分からなくても、より良い心の状態にするために、嘘でもよいから導くこと、それ

が方便である。方便は、その人の機根（宗教心、理解力、気質など）に応じて、その人にあった適切な言葉により説得することが大切である。

人生は苦であるというのが仏陀の基本的な教えである（中村, 218: 569-723/4498）。四苦八苦とは、生老病死に加えて、愛別離苦（愛する対象と別れる苦）、怨憎会苦（憎む対象に出会う苦）、求不得苦（求めても得られないなど欲望に起因する苦）、五蘊成苦（五蘊、すなわち物である色受想行識、実在する物に執着することによる苦）の8つをいう。実際にこれらの苦から自由になることは極めて難しいが、仏教の目的の一つでもある。

4) 空海の秘蔵宝鑰と十住心論について

『秘蔵宝鑰』（空海, 830b）には、「生まれ生まれ生まれ生まれて、生の始めに暗く、死に死に死に死にて、死の終わりに冥し（人は何回も輪廻転生するのに、どうして生まれてくるのかわからないし、何度も死んでいるのに、死の終わりがどうなっているのかわからない）」と書かれている。空海は、人の心は個別で量ることができないのだが、これを10段階にまとめたとしている。すなわち、表1に示すように、①異生羝羊心、②愚童持斎心、③嬰童無畏心、④唯蘊無我心、⑤拔業因種心、⑥他縁大乘心、⑦覺心不生心、⑧一道無為心、⑨極無自性心、⑩秘密莊嚴心、である（弘法大師空海全集編輯委員会, 1983a, 1983b; 加藤他, 2010）。

表1. 十住心論（空海, 830）

1	異生羝羊心	性欲、物欲など煩惱の心
2	愚童持斎心	道德の目覚め、儒教的境地
3	嬰童無畏心	道教、外道、神への帰依心
4	唯蘊無我心	小乗仏教の声聞乘の境地
5	拔業因種心	小乗仏教の縁覚乘の境地
6	他縁大乘心	大乘仏教の法相宗の境地
7	覺心不生心	大乘仏教の三論宗の境地
8	一道無為心	大乘仏教の天台宗の境地
9	極無自性心	大乘仏教の華嚴宗の境地
10	秘密莊嚴心	真言密教の境地

以下に簡単に各住心（心の在り様）を説明する。

①第一住心「異生羝羊心」：性欲物欲などの煩惱の心である。「凡夫狂酔して善惡を弁えず、愚童痴暗にして因果を信ぜざるの名なり」とあり、雄羊のような心（羝羊心）で、来世は地獄必定という住心である。初め人は皆この住心であり、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天の6つの世界に生まれ変わる（六道輪廻）。輪廻から抜け出すことが「涅槃に入る」ことで、仏教の主目的である。

②**第二住心「愚童持斎心」**：「**羝羊**に自性なし、**愚童**も亦た愚にあらず」と異生羝羊心であっても、ある時道徳に目覚めることがある。礼、仁、義、智、信などの儒教的な教義に従うようになり、第一住心から一歩進んで第二住心となる。

③**第三住心「嬰童無畏心」**：道徳に目覚めてから、さらに神への帰依心が生じると第三住心となる。「**外道**（**仏教**以外の教え）、人を厭い、凡夫、天を欣うの心なり」と儚い人生を嫌い、天に生まれ変わって、ほぼ永遠の生命を得、あたかも幼子が母親の胸で安らいでいたいと思う住心である。

④**第四住心「唯纏無我心」**：ここから**仏教**の住心である。仏陀の説法を聞いて、悟りの境地に至る段階の住心であり、いわゆる小乗**仏教**の**声聞乗**である。「法を存するが故に**唯纏**」とされる。「法」とは物の存在であり、物（五纏：色受行想識）が世界に存在していることを認めるが、「人を遮するが故に無我なり」とされ、心の中に「人我」とかアートマン（個人我）などの魂は無いと悟っている。仏教では、靈魂や神の存在を認めていない。

⑤**第五住心「拔業因種心」**：師がなくなると自分で物事を観察し、因縁を考え、四諦（苦諦、集諦、滅諦、道諦）や八正道などを、自ら悟った住心である。いわゆる小乗**仏教**の縁覚乗である。大乘**仏教**では、第四住心と第五住心は他人を考えない、大悲の心がないとされている。

⑥**第六住心「他縁大乗心」**：ここから大乘**仏教**の住心となり、法相宗の境地である。「法界の有情を縁ずるが故に他縁なり。声・独の洋・鹿に簡が故に大の名あり。自他を円性に運ぶが故に乗と曰う」とされている。有情とは人のことで、「火宅の人」の例え話がある。家が火事になり、子どもたちを外に出そうと考えて、外には羊車、鹿車、牛車があるから、外に出ればそれをあげると言った。「声・独（声聞乗・独覚乗）」は羊車と鹿車の自分だけの乗り物（小乗）でよくない。牛車の大きな乗り物（大乘）がよい。他縁と言っているように、自分のみならず他人も悟りの境地に運ぶという大乘の住心である。

⑦**第七住心「覺心不生心」**：三論宗の境地である。「彼れ是の如く無我を捨てて、心主自在にして、自身の本不生を覺る」とされている。心の中には心主があり、外界を認識することができる。自在とは、何ものも礙がなく、自分の心は消えたり生まれたりはしないと覺ることである。三論宗には、「不生不滅」「不斷不常」「不一不異」「不去不来」

の「八不の教え」がある。心は不生不滅であり、消えたり生まれたりするものではない。そして不斷不常であり、なくなつたように見えても常にある。不一不異とは、一でもなく沢山でもなく、また一といえ一だが、そうでないといえ一ではない。不去不来とは、去るといえば去らないし、来ないといえ来るといふなど、全て「不」で否定している。

⑧**第八住心「一道無為心」**：天台宗の境地であり、「如実知自心」「空性無境心」とも呼ばれる。「境即ち般若、般若即ち境なり」とされている。般若は智慧で、境は環境の意味である。知恵と環境、つまり内部と外部に境界は無く（無境界）、「即ち此れ、実の如くに自身を知るを名づけて菩提と為す」と自分自身の心を知ることができ、菩提心を知ることができる住心である。

⑨**第九住心「極無自性心」**：無自性の極みで、華嚴宗の境地である。この住心には、**顯略趣**と**秘密趣**という2つの異なった解釈がある。秘密趣は真言密教に通じる心とする考えである。顯略趣は顯教の最高位であるが、「有為・無為界を離れて、諸の造作を離れ、眼耳鼻舌身意を離れて極無自性心生ず」と述べられているように、心は無自性だという心の状態の極みであり、最後の悟りに至る一歩手前の住心である。

⑩**第十住心「秘密莊嚴心」**：真言密教の境地で「九種の住心は自性なし。転深・転妙にして、皆是れ因なり。真言密教は法身の説、秘密金剛は最勝の真なり」と説明されている。第一住心から第九住心までは「**顯教**」と呼ばれ、大日如来の応化身による方便としての教えであり、真実の教え（真言）ではないとされる。

密教は、大日如来の法身の真実の教えである。大日如来は大乘**仏教**を教えるために、その時の人々に適した姿形になって、時には預言者、仏陀、多くの聖人になって、教え導いている。例えば、孔子、莊子、孟子なども、全て大日如来の応化身であり、儒教も道教も**仏教**の一部であるともいえる。あえて言えば、アブラハムもイエス・キリストも大日如来の応化身であるという考えである。それらの教えは顯教であり、真実の教えは密教にあるとする。この顯教と密教の相違は、『弁顯密二教論』（空海、815）に詳述されている（弘法大師空海全集編輯委員会、1983b；加藤、2014）。

5) 十住心論からの帰結

十住心論は当時の宗教を空海が順序づけたものであるが、心の発達段階として各住心を否定していない。心は

多様で、上の住心から異生羝羊心に戻ることもある。第二、第三住心へと進んだときに、仏教以外の宗教に入信することもあるが、それを否定せずに容認し、大日如来が導いてくれたと考えればよい。世に多数の神仏・聖人が存在するのはそのためであり、全て大日如来の応化身であると考ええる。欧米の一神教の立場からは、これは多神教だと誤解するかもしれないが、全てが大日如来による方便であると考ええる。

日本には古くから神道があるのだが、聖徳太子は大乗仏教を受け入れ、とくに法華経を重視した。しかし、奈良仏教では一度廃れたが、天台宗の祖である最澄は、聖徳太子の考えを復活させたとも考えられる（梅原、2005、1681-1717/4892）。

神道の天照大神は、太陽神とも考えられるが、大日如来も元々は「遍照金剛」の意であり、全てを照らすという太陽神とも考えることができる。神道から見れば大日如来は天照大神であり、密教から見れば天照大神は大日如来の応化身と考えれば良い。大乗仏教では神の存在をとくに否定もしないが、肯定もしないという考えである。「神仏習合」という考えは、実に日本的であり、日本人に適合した考えでもあるだろう。

空海の十住心論の考えは、密教以外の他宗教や思想も許容していることが重要である。どんな教えを信じても良く、より良い段階に進めるように努力すればよい。最終目的は、次に説明する即身成仏である。

6) 即身成仏について

「即身成仏」はよく知られている言葉だが、「父母からもらったこの身のままで成仏、すなわち悟りに至る」と空海（817）は述べたのだが、今では死後に極楽浄土に往生することと考える人が多いと思う。

空海（817）は『即身成仏義』で、二経一論八箇の証文といって、大日経と金剛頂経の二つの経と菩提心論（二経一論）から、8箇所の文章を引用して、「即身成仏」の可能なことを論じている（弘法大師空海全集編輯委員会、1983b；加藤、2013b、70-881/2695）。

表2. 即身成仏の頌（空海、817）

六大無礙常瑜伽 四種曼荼各不離 三密加持速疾顯 重重帝網名即身	六大無礙にして常に瑜伽なり 四種曼荼各々離れず 三密加持すれば速疾に顯わる 重重帝網なるを即身と名づく
法然具足薩般若 心教心王過利塵 各具五智無際智 円鏡力故実覺智	法然に薩般若を具足して 心教心王利塵に過ぎたり 各々五智無際智を具す 円鏡力の故に実覺智なり

菩提心論（龍樹、年不明）に「真言法の中にのみ即身成仏するが故に三摩地の法を説く。諸経の中において闕して書せず」（不空訳、年不明、14/129）と述べられている。即身成仏という言葉は、菩提心論にしか述べられていなかった。菩提心論は密教の第3祖龍猛（龍樹）によるものと言われ、「もし人、仏慧を求めて、菩提心に通達すれば、父母所生の身に、速に大覺の位を証す」（不空訳、年不明、125/129）とあり、生まれたままのこの身のままで、我々は仏陀になれるとされている。

空海は、表2のように8行の「即身成仏の頌」を著して、それを解説することで、即身成仏が可能なことを論じている。最初の4頌が「即身」、次の4頌が「成仏」の意味に該当する。

「六大無礙にして常に瑜伽なり」の六大とは、地・水・火・風・空・識のことで、世界を構成する6要素である。地水火風は物質の四大要素であり、物質の容れ物である空（空間）と、主観を構成する意識の識も要素とされているので、密教では主観と客観の対立はない。

「四種曼荼各々離れず」の四種曼荼とは、大曼荼羅、三昧耶曼荼羅、法曼荼羅、羯磨曼荼羅の4つの曼荼羅のことである。大曼荼羅は、人の姿で各如来や菩薩を描き、色付けして描かれたものである。三昧耶曼荼羅は、蓮華とか刀剣とか、各菩薩を象徴する絵で描かれた曼荼羅である。法曼荼羅は、種字真言（梵字）を用いて書かれたものである。羯磨曼荼羅は、各菩薩の活動などを立体的に表した曼荼羅である。これら4曼荼羅は、全て同一であり相違がないことを述べている。金剛界曼荼羅の中央に大日如来、東に阿闍如来、南に宝生如来、西に阿弥陀如来、北に不空成就如来を配すとされている。これらの五仏がそれぞれ五つの智を表している。阿闍如来は大円鏡智、宝生如来は平等性智、阿弥陀如来は妙觀察智、不空成就菩薩は成所作智を表し、中央の大日如来は法界体性智を表す。この五智で一切智智（一切の智を知る）、全ての物事を説明できる知恵を持っていることを示している。ただし、全ての如来や菩薩は前述のように大日如来の応化身であり、曼荼羅は描かれた図のみで完結しているのではなく、この関係が全ての衆生を含んで広がっている。我々は遍満する大日如来のネットワークで全員が繋がっているのであり、我々衆生も大日如来の応化身として、我々の中には大日如来が生まれた時から存在している。これを悟れば、我々も即身成仏できるというのが空海の論点である。

「三密加持すれば速疾に顕わる」の「三密」とは大日如来の行う身口意による活動である。身体で印契を結び（身密）、口で真言を唱え（口密）、心の中で念じること（意密）を大日如来は常に行って、我々に教えを悟らそうとしている（加）。我々も同様のことを行うのだが、凡夫が行う場合には「三業」と区別することがあり、大日如来の加を衆生が感じ取ることを「持」という。これらを合わせて「加持」と呼び、世の中の全ての現象は大日如来の現れであることに気付けば、大日如来と一体になれるのである（加持感応）。

「重重帝網なるを即身と名づく」の「帝網」とは、帝釈天が持っている網で、水晶の玉（宝珠）が多数はめ込まれ、各々の宝珠が互いに全てを映しているという。大日如来を中心としたネットワークが、この珠網のごとくであることを意味している。この関係を我々が悟れば良いことを示している（即身）。

次の4句が「成仏」を説明している。真言密教には、「本不生」という重要な言葉がある。大日如来は自然に存在しており、原初から自然に仏陀として法界に遍満し、これを「自然法爾（法然）」とか「阿字本不生」とか言う。阿字は梵語の最初の字であり、また否定語にもなる。表2の最初の句で、大日如来は元々から「一切智智（薩般若）」を備えていることを意味している。

「心数心王刹塵に過ぎたり、各々五智無際智を具す」の意味は、心は衆生で智は仏と考えるが、両者は実は同じものである。智も無量であり、心も無量で数えることはできない。曼荼羅中央の大日如来は法界体性智を具しているが、実は凡夫である我々もそれを具していることに気がつくだけで良い。大日如来を取り巻く四仏は四智を示しており、あわせて五智になるが、説明のために各々別々の智としていっただけで実は一体である。

最後の「円鏡力の故に実覚智なり」は、仏陀は正しい知恵を持ち、実覚智者とも言われる。高台にある大きな鏡は、周りの一切のものを映し出すのと同様に、大日如来の心の鏡は、この世の最も高い場所にあつて、世の有様を全て正確に映しており、実際に役に立つ知恵である。

結論として、大日如来も衆生も六大から成り、何ら異なるところはない。大日如来は各人の心の中にあり、父母からもらったこの身のままで成仏できる、というのが空海の主張である。

それまでの仏教の考えでは、最低でも3回生まれ変わら

ないと成仏できないとか、「六劫」成仏とか極めて長期間の修行をする必要があるとされていた。空海は「覚れば仏で迷えば衆生」と述べ、心の中の大日如来の存在に気づくだけでよいとした。実際にはそれなりの修行が必要であり、凡夫には即身成仏は簡単ではない。

真言密教の教えは、空海があまりにも偉大で完成されたものであったため、その後、大きな展開は見られていない。一方、最澄による天台宗は真言密教の教えを取り入れ、完璧でなかったが故に、鎌倉時代に法然、親鸞、日蓮などを輩出し、現在に至る各宗派へと導いた。空海の即身成仏は自力本願の要素が大きく現実には難しかった。このため、口称念仏「南無阿弥陀仏」や、お題目「南無妙法蓮華教」を唱えるだけで、誰でも極楽浄土に往生できるという、絶対他力本願による成仏思想が、現代の日本人に根付くことになったといえるだろう。

4. まとめ

今回、日本人のスピリチュアリティ（靈性）を考える上で、の参考として空海の思想を説明した。大乘仏教の教えは、自利のみならず他利をもたらす思想のため、抜苦与楽が自然な発想である。

加藤（2013a, 2000/2645）が指摘しているように、空海の密教思想から、日本人の多くがなぜ多様な宗教に寛容なのかを説明できるだろう。すなわち、十住心論で述べられているように、多様な心があっても構わない。ただし、より良くなろうとする考えが重要である。鎌倉時代以降は、最澄による天台宗から多くの聖人が排出されたが、即身成仏や山川草木悉皆成仏の思想は、空海の密教の影響が大きいものと考えられる。

今後、スピリチュアルケアの理論や看護実践のために、患者やその関係者の日本人の宗教的背景や靈性を考慮した研究が発展することを期待している。

文献

- 阿満利磨（2004）日本人はなぜ無宗教なのか、東京、筑摩 e-ブックス。
井筒俊彦（1957）コーラン 上、東京、岩波文庫。
加藤精一（2013a）空海入門、東京、角川ソフィア文庫、Kindle 版。

- 加藤精一編 (2013b) 空海「即身成仏義・声字実相儀・
呬字儀」, 東京, 角川ソフィア文庫, Kindle 版.
- 加藤精一訳 (2014) 空海「弁顕密二教論」, 東京, 角川
ソフィア文庫, Kindle 版.
- 加藤純隆, 加藤精一 (2007) 空海「三教指帰」, 東京,
角川ソフィア文庫, Kindle 版.
- 加藤純隆他訳 (2010) 空海「秘蔵宝鑰」, 東京, 角川ソフィ
ア文庫, Kindle 版.
- 弘法大師空海全集編輯委員会 (1983a) 弘法大師空海
全集 第一巻, 空海 (830a) 秘密曼荼羅十住心論,
東京, 筑摩書房.
- 弘法大師空海全集編輯委員会 (1983b). 弘法大師空海
全集 第二巻, 空海 (830b). 秘蔵宝鑰, 東京, 筑摩
書房, 3-146.
同書, 空海 (815). 辯顕密二教論, 147-218.
同書, 空海 (817). 即身成仏義, 219-262.
同書, 空海 (806). 請来目録, 529-569.
- 弘法大師空海全集編輯委員会 (1984). 弘法大師空海
全集 第六巻, 空海 (797) 三教指帰 (聾瞽指帰),
東京, 筑摩書房, 4-143.
- 弘法大師空海全集編輯委員会 (1985). 弘法大師空海
全集 第八巻, 空海 (835) 御遺告, 東京, 筑摩書房,
37-95.
- 厚生労働省 (1999a). WHO憲章における「健康」の定
義の改正案について, 2023 年 4 月 21 日,
[https://www.mhlw.go.jp/www1/houdou/1103/
h0319-1_6.html](https://www.mhlw.go.jp/www1/houdou/1103/h0319-1_6.html).
- 厚生労働省 (1999b). WHO 憲章における「健康」の
定義の改正案のその後について (第 52 回 WHO 総会
の結果), 2023 年 4 月 21 日,
[https://www.mhlw.go.jp/www1/houdou/1110/
h1026-1_6.html](https://www.mhlw.go.jp/www1/houdou/1110/h1026-1_6.html).
- 厚生労働省 (2021). 「診断時からの緩和ケア」について,
厚生労働省健康局がん・疾病対策課第 1 回がんの緩
和ケアに係る部会, 資料 3-1.
- 宮坂宥勝 (2011). 密教経典 大日経・理趣教・大日経疏・
理趣釈, 東京, 講談社学術文庫.
- 宮坂宥勝, 梅原猛 (2014). 仏教の思想 9: 生命の海 (空
海), 東京, 角川ソフィア文庫, Kindle 版, 9-11 / 346.
- 中村元編著 (2018). 仏教経典散策, 東京, 角川ソフィア
文庫, Kindle 版.
- 龍樹 (年不明). 不空訳 (年不明): 菩提心論
(こんこうちようゆがちゅうはつあのかたらしんみやくさんぼだいしんろん
金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論), 書き下
し Kindle 版 (2016).
- 島田裕巳 (2009). 無宗教こそ日本人の宗教である, 東京,
KADOKAWA, 120-149/1819.
- 鈴木大拙文学研究会 (2021). 鈴木大拙電子全集 (全 18
作品), 日本文学作品全集 (電子版), 鈴木大拙 (1944):
日本の靈性, 954-1321/1725, 東京, Kindle 版.
- 梅原猛 (2002). 梅原猛著作集 9 三人の祖師 最澄・
空海・親鸞, 東京, 株式会社小学館, Kindle 版,
11291-11374 / 12171.
- 梅原猛 (2005). 最澄と空海—日本人の心のふるさと—,
東京, 小学館, Kindle 版.
- W.V.O.Quine (1960). 大出晁・宮館恵訳 (1984): こと
ばと対象, 東京, 勁草書房, 42. (Word and Object,
The MIT Press).